

日中関係と日本学そして共同化する東アジアという視座

— 研究所設立50周年に寄せて —

江 藤 茂 博

一 日中国交正常化（一九七二）から六四天安門事件（一九八九）まで

一九七二年の田中角栄首相の訪中と「日中共同声明」による日中国交正常化の時代が始まった。一九七六年の、周恩来死去、四五天安門事件、毛沢東死去という国内動揺の年を越えて、一九七八年一〇月に鄧小平は来日する。日中平和友好条約批准書交換のための来日であったが、彼は日本の幾つかの大企業の視察も行った。そこで当時の日本の最新技術を目の当たりにしたのであった。その一月後に、中国では文化大革命が否定されると共に、改革開放路線が敷かれる。さらに一二月の中央委員会第三回全体会議で、農業、工業、国防、科学技術の「四つの近代化路線」が決められた。そして、翌一九七九年一月、鄧小平は訪米に向かう。この時もまた、彼はアメリカの産業の最新技術とその発展を目の当たりにしたのである。農村改革と共に、同年、外国資本の投資を可能にする四つの「経済特区」を開いた。一九八四年には、「国家級経済技術特区」を設置し、翌年には「沿海経済開放区」を開き、次々と外国資本の導入による工業及び科学技術の振興を目指したのであ

る。これらを推進したのは、もちろん鄧小平であるが、彼は胡耀邦と趙紫陽を登用して改革開放政策を押し進めたのである。胡耀邦に続き、共産党総書記となった趙紫陽は、一九八八年一月に「沿海地区経済発達戦略」を発表し、さらなる外国資本の投資を促したが、保守派の抵抗も大きく、近代化路線は大きくは展開できなかった。胡耀邦が一九八九年四月に倒れ、その追悼の集会がデモとなって、天安門事件（一九八九年六月四日）（注1）が起こり、政府による武力鎮圧が行われた。

この日中国交正常化からの十年間、日本語学習が中国でブーム（注2）となり、それを支えたのが日本による日本語教育振興の政策であった。具体的には、一九七九年二月の大平首相訪中時に、「日中文化交流協定」が締結され、日本側からの「対中国日本語研修特別計画」が実施されて、北京語言学院（注3）での国際交流基金（注4）日本人講師派遣による在中華人民共和国日本語研修センターが、一九八〇年八月に開校した。いわゆる大平学校である（注5）。一九八五年に閉校するまでの五年の間に、一年間に二〇〇名、計六〇〇名が日本語及び関連領域を学び、その間に訪日研修も受けたのである。さまざまなバックグラウンドを持った中国各地の、いわゆる精鋭の日本語教師や日本研究者たちが、ここで日本の言語文化を学ぶこととなった。もちろん、日本からも日本語の専門家だけでなく日本の社会文化や言語学に関する専門家たちが特別の待遇で派遣され（注6）、そこからさまざまな研究ネットワーク（注7）が生まれることにもなった。

一九八九年の天安門事件前には、一九七二年からの日本語ブームで、日本語を学んだ世代の学生や、一九八〇年開校の大平学校で学んだ日本語教師や日本研究者たち、さらに彼らから学んだ学生たちが日本にやって来る。最初の日本留学ブームである（注8）。日本各地の大学に中国からの国費や私費での留学生たちが、日本社会の様子を目の当たりにしたということでもある。

日中関係における国交正常化と中国の政策転換、そしてそこに協力する「対中国日本語研修特別計画」の実施は、一九八三年八月の「二二世紀への留学生政策に関する提言」での留学生の受け入れ一〇万人計画（注9）の発表に結びついた。そのことで、日本への中国人留学生はさらに増加する。一方で、当時の日本のバブル経済は、労働力の不足を生み、そこに就業目的の日本語学校留学生もたくさん来日することとなった。私自身も、一九八〇年代の中頃、短期での留学生たちと出会ったこと

もあれば、大学院に入学してきた留学生たちとも出会ったことがある。その後の天安門事件で彼らがどうなったのかと、当時私たちは心配していたことを思い出す。留学生一〇万人計画が発表された一九八三年に一〇四二八人の留学生数が、一九九三年に五二四〇五人と増え、そして二〇〇三年にはついに一〇万人を超えることになった(注10)。

二 一九九〇年代

留学生の数では、一九九〇年代は四万人から六万人に増えるのだが、就労留学生や不法残留留學生の問題により、法的な整備がこの間に推進される。一九九〇年に出入国管理法の改正案が施行されて、留学生受け入れが厳格化されたことによって、この一九九〇年代には留学生数の急激な増加は抑えられることになった。もちろん、労働市場が縮小した日本のバブル経済の崩壊も大きな要因であった。やがて日本経済の立ち直りと共に、留学や就学の審査が緩和されると再び留学生の数が大きく増える。同時に一九九〇年代末からの地方私立大学の入学者不足を補うための留学生確保とも結びつき、二〇〇〇年からの留学生数は大きく伸びることになった。この、一八八三年の留学生一〇万人計画以降二〇〇〇年代前半までを「漸増期」「停滞期」「急増期」に分けた白石勝巳は、この一九九〇年代を「停滞期」とした(注11)。

この白石によって「停滞期」とされたのは留学生の動向とと重なるならば、一九九一年の大学設置基準の改訂による大学教育課程の自由化と一九九二年をピークとする一八歳人口の減少が始まる時期だった。つまり、一九九〇年代は、大学の設置基準の改訂によって短期大学の四年制大学化と四年制大学の学部増設の展開と、その後を追うように急速な一八歳人口の減少が起きたのである。こうした一八歳人口の減少とは逆に、一九八四年に四六〇校数だった四年制大学が一九九四年には五九三校数に増えた。しかし十八歳人口の減少のために、一九九〇年代の後半からは私立大学の定員割れ問題(注12)が生じたのである。ちなみに四年制大学はその後も増え続けて、二〇一八年には七八七校となっている。「停滞期」とは、私立大学の定員割

れによって大量の留学生を受け入れる直前までの期間であった。

一九九〇年代の留学生数抑制傾向は、日本側にも中国側にも共に緊張感をもたらすものになった。一九九二年の日本に於ける一八歳人口のピークとその後も増え続ける大学数の増加が、日本の高等教育では学生を求めようとする力学が生まれていたのである。一方、中国の高等教育では、進学率の向上による大学生数の増加と受け入れる大学の拡張の傾向が生まれていた。日本の高等教育での学生の不足と中国の高等教育での受け入れ大学の不足（注13）とが、相互に水位の落差を埋めようとする緊張を生んだのである。また、この一九九〇年代は、日本も中国も大学の拡張による教員不足の時代期でもあった。

三 一九九〇年代の留学生の実情

一九九〇年代の留学生受け入れは、日本としては手探りの状態であり、留学生受け入れの制度的な整備も不十分（注14）であった。そのこともあってかこの時期には大きく二つの系統での留学生受け入れがおこなわれていて、一九九〇年代末からの留学生「急増期」を準備することになる。

系統の一つは、研究志向の留学生たちである。本国での研究者養成制度である大学院進学のを海外に求めたのである。特に日本学関係を学びたい者にとっては、当然日本で学ぶことを選ぶ。少なくともそうした傾向は生まれるはずだ。もちろん、大学学部入学や日本語学校から始める留学生も少なからずいたと思う。日本で学位を取得した彼らは、そのキャリアを就職に生かす者もいれば、帰国後大学に職を得る者もいた。逆にすでに大学教員であるものが学位取得を目指す場合もあった。もう一つの系統は、遊学志向の留学生たちである。日本語学校への留学を中心とした学生たちで、本国の大学制度での不本意な学歴等から再出発も含む非研究志向の留学生たちである。なかには研究志向に向かう留学生もいただろうし、日本語学校や大学を中退して帰国する者や不法滞在の労働者となる留学生もいた（注15）。この二つの系列は部分的には重なりながらも、

日本の高等教育のなかに留学生受け入れに関する相互理解とそれに基づいた留学生文化が生み出されていく。研究志向の留学生の中には、大平学校の第二世代がいただろうし、日本の大学の研究活動に参加する大学院学生として登場した者もいた。また、帰国を望むかどうかは別として、急増する中国の大学での教員としての市場が、大学院を修了した留学生には広がっていたのである。

もちろん日本語能力については、中国の日本企業誘致とそこでの日本語ができる高給労働者の養成が結びついてきた。日本企業が進出する地方での日本語ブームは（注16）、日本企業に勤務する人材だけでなく、地元の日本語教員としての人材も求められたのではないか。この一九九〇年代末から、日本留学で学位を取得した留学生たちが帰国後に中国の大学に勤務すると共に、日本の学会での研究にも参加するようになる。一九九〇年代は、日本の研究組織が東アジアに広く開かれるための助走の時代でもあったのだ。

四 二〇〇〇年代から二〇一〇年代へ

二〇〇〇年代の中国の経済的な成長は、大学進学率の高まりによる大学の拡張がさらに進む。しかし、大学の急な拡張には限界も生じる。たとえば、大学教員の育成確保には、それ相応の時間とコストがかかるのは当然のことだ。中国国内での大学進学に満足できなかった若者は、選択肢のひとつとして海外の大学への留学を選ぶことになる。また、二〇〇〇年代に入り、インフラ整備が整ってきた中国は、バブル崩壊から立ち直ろうとする日本企業の進出を呼び込むのに十分な魅力を持つ国となっていた。こうした中国進出外資系企業への就職を望む若者には、外国語を学ぶという選択肢が用意されていたことは繰り返すまでもない。さらに、二〇〇〇年代の日本は中国に比べるとまだ経済的に豊かであり、留学生たちにとってはお金を稼ぐという魅力もあったのだ（注17）。もちろん、ここにも研究志向と遊学志向の二つの系列の留学生はいただろうし、学部への

入学者の多くはより有利な就職を求める留学生だった。

すでに一九九〇年代後半には、日本だけではなく中国でも大学付属の日本語学校や都市部の日本語学校が設立されており、日本の大学に留学生を送り込むルートも業者を通じてすでに確立していた。二〇〇〇年代は、中国での日本語教育の広がりと共に、日本の大学もまた留学生を大量に受け入れる時代になった(注18)。日本の大学は淘汰の時代と言われ、大学教員のマーケットが縮小していく時代になっていた。全体的には日本人学生の大学院進学が減少し、それとは逆に、日本の大学院はアジアからの留学生が多くを占めるようになっていく。こうした傾向は二〇〇〇年代の後半からさらに二〇一〇年代も続くことになる。二〇〇八年、文部科学省によって二〇二〇年までを目標として「留学生三〇万人計画」が策定されたが、すぐにその数値を達成することとなった。

二〇一〇年代は、中国の大学では教育研究の大きな改革が求められた。教育力や研究力そして国際化が問われるようになったのである。もちろん、日本の大学でも同様の改革が求められるようになった。特に中国国内では日本学の領域は学位取得が困難なので、研究者あるいは研究者予備軍の日本留学が増えた。また、そのことで日本の日本学研究に刺激を与えることになる。今日の高度情報化の時代にあつては、大学と教育研究の国際化はさまざまな圧力によって気がつかないうちにも展開しているのだ。

大平学校以降、着実に数を増した中国の大学の日本語学科とそこで日本語を教授する教員たちは、自身の日本語研究だけでなく、さまざまな日本に関する学問領域で日本と共同研究を行う人材を育てた(注19)。海外の大学での国際化が、日本の大学の国際化を促すことになる。たとえば、国語学会が、二〇〇四年に日本語学会に名称を変えたのも、こうした学問の国際化の表れだと考えられる。日本のさまざまな学会で発表する中国人研究者が多くなっただけではない。中国の研究者たちと協同開催する学会や共同で運営する学会も登場してきた。人文科学や社会科学に限らず、こうして二十世紀の終わり頃から、東アジアという地域からの視座での蓄積が始まったのである(注20)。さらに日本学関係に限定するならば、日中韓の研究者が集

まる学会（注21）もあれば、日中韓のそれぞれの国で順番に大会を開く学会もある。また、特定の言語に囚われない東アジアに関する研究活動も展開している。教育においても、東アジア共同キャンパス構想や、日中韓の大学や大学院におけるダブルディグリー制度の構築など、東アジアにおける学問領域の共同化（注22）は大きく展開している。そして、日本漢学という知識の領域もまたその一つなのである。

この漢学は、中国の思想学芸が辺境に伝わり、さらに変容しながら自国の学芸文化となったものを対象とする。そこには、文化の出発となった地域や文化圏では衰退してしまっただけのものもある。北欧のフィンランド語には、古いヨーロッパの言語が残っていて、言葉の冷蔵庫と呼ばれている。同じように、中国では忘れかけられた学芸文化が、その形を変えながらも、日本などの近隣の漢字文化に温存されていることもあるのだ。その意味で、漢学の研究領域は、東アジアという視座で相互性を前提とした比較文化研究と重なることになる。もちろん、これまでも東アジアの学問として漢学研究は重ねられてきた。二松学舎大学に限るならば、文部科学省補助事業「21世紀COEプログラム『日本漢文学研究の世界的拠点の構築』（二〇〇四～〇八年度）」と文部科学省私学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の『知』の形成と漢学」（二〇一五～一九年度）であった。ここではそれらの展開の背景として、一九七〇年代からの日中の文化学術交流の具体的な展開と日本学領域の教育研究との関係を取り上げてみた。

五 結 び

この一から四までの報告は、本学SRF事業での『講座 近代日本と漢学』全八巻の最終巻（二〇二〇年四月二五日 戎光祥出版刊行予定）の末に掲載する文章である。この事業は、いうまでもなく東アジア学術総合研究所の研究蓄積を基盤としている。この研究所の前身である東洋学研究所は、「日本および東洋諸国における学術・文化・歴史を研究し、わが国精神文化

の発展に寄与する目的」(注23)で1969年に設立された。設立意義として書かれた文章の冒頭には、「大学の機能は教育と研究の両面にあることは、今さら言うまでもない。本学は教育の面においては、先に大学院を設置して大学から大学院へと一貫教育をなし得る態勢を整備した。そこでこの度予定計画していた研究の面の態勢を整備することにした。それが二松学舎大学東洋学研究所である。その組織は第一部国語国文学部、第二部中国学部、第三部歴史学部の三部制である。この組織は本学の学科組織から当然な結果である。それぞれの部門独自の研究を進めて、大学の教育に一層の効果あらしめることは当面の目的である」(注24)という。当時は、文学部のみで単科大学だったので、その「教育と研究」の方向性として、「国語国文学」「中国学」「歴史学」が設定されていたのであろう。五十年前の話である。

今回の『講座 近代日本と漢学』全八巻は、東洋学研究所設立時の「目的」に対する、経過報告のひとつでもある。そして、研究所設立時には想像もつかなかった教育研究の国際化(注25)が動き出し、二松学舎大学もまた創立時からの学風に応じた国際化の中の教育研究に向かうことになった。そのことを、『講座 近代日本と漢学』全八巻で示すことができているならば、編集に関わったもの一人として、その責務を微力ながらも果たせたと思う。

東洋学研究所設立時とは異なり、現在本学は文学部のみではなく社会科学系の国際経済学部との二学部体制である。そして研究所の名称と内容も、社会科学的な領域を含む東アジア学術総合研究所となった。しかし残念ながら研究所設立五十年後の現在もまだ、「歴史学」の「教育と研究」は、本学にとってこれからの課題である。これを踏まえた、「歴史・社会学部」設置の私の構想は、前の大学執行部では否定された。かろうじて、文学部内に社会科学も含み込める小さな学科が許されたのみである。それでも、二学部間の連携を新設の都市文化デザイン学科で強くし、五十年前の「教育と研究」の理念を受け継ぎ、さらに今後「歴史学」を強化したいものである。研究所創立五十周年にあたり、日中関係と日本学・漢学そして東アジア漢学文化圏での教育研究環境というものをここでは考えてみた。あらためて、「大学の機能は教育と研究の両面にあることは、今さら言うまでもない。」という東洋学研究所設立の言葉を大切にしたいと思う。

- 1 注 論の冒頭では、六四天安門事件と四五天安門事件とで区別したが、一九七六年四月五日の周恩来死去の時の天安門事件を一次とするならば、この事件は二次天安門事件と呼ぶことになる。
- 2 ここでは国際交流基金のホームページに掲載されている概略「日本語教育実施状況」の「沿革」の記述に拠った。本稿の内容とも関連するので、以下一九七〇年代から二〇一〇年頃に関する記述を引用する。「一九七二年の日中国交正常化により第一次日本語ブームが訪れ、多くの大学で日本語教育が開始された。一九七三年から各大学で日本語の教科書や辞書の編纂が始まり、ラジオの日本語講座の放送も始まった。一九七九年には現在の東北師範大学で日本留学生（学部）のための予備教育が開始された。また、一九八〇年に当時の大平首相の提唱を受ける形で日中両国間政府の合意に基づく「在中国日本語研修センター」（通称「大平学校」）が設立され、一九八〇年から一九八五年までの五年間に計六〇〇名の大学日本語教師の再教育を実施した。
- 一九八〇年代になると、まず中等教育、次に高等教育での日本語教育シラバス整備が始められた。また、テレビ日本語講座の放送も始められ、一九八〇年代半ばには第二次日本語ブームとなった。さらに一九八五年より上記「大平学校」が発展的に解消する形で「北京日本語研究センター」が設立され、日本語教師の再教育と大学院修士課程の学生の教育を平行して実施するようになった。
- 一九九〇年代には、各教育段階でのシラバス整備の結果を受けて、それに準拠した教材が次々に出版され、日本語は英語に次ぐ第二の外国語の地位を確立した。二〇〇〇年代に入り初等・中等教育機関では学習者数が一時的に減少したものの、その後は高等教育機関や学校教育以外の機関に学習者数の大幅な伸びが見られた。特に高等教育機関では職業大学（短期大学）における日本語学部が増加し、また、第二外国語として日本語を履修する学生も増えている。二〇一〇年以降、中国教育部が大学教師の再教育を重視し、傘下の出版社がオンライン研修プラットフォームを開発し、学会や大学等日本語教育機関、各出版社が教師研修を主催するなど中国側発の動きが活発化している。」(<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/china.html>)
- 3 一九六二年に外国留学生高等予備学校として創設される。一九六四年に北京語言学院、後に北京語言文化大学を経て、現在の北京語言大学となる。
- 4 独立行政法人国際交流基金の前身。
- 5 孫曉英「『大平学校』と戦後日中教育文化交流」(日本橋書院二〇一八年五月)には、大平学校の詳細な調査分析と付録として「大平学校派遣講師名簿」「大平学校研修生名簿」が掲載されている。
- 6 注5の孫曉英「『大平学校』と戦後日中教育文化交流」に詳しく触れられている。
- 7 日本語研究だけでなく文学研究の領域でもその後の研究ネットワークを保ち続ける事例がある。また、二松学舎大学などでも、「大平学校」世代やその世代の教え子を研究の人的ネットワークのなかで受け入れてきた。
- 8 川勝守「中国改革開放の歴史と日中学术交流」(汲古書院二〇一三年一月)では、八〇年代に著者自身が経験した留学生来訪の様子が簡単にまとめられている。「七〇年代末より日本各地の大学に留学生が現れ、一九八〇年代にはその数が激増した。一体、中国から海外、特に日本へ留学生が出現したこと自体が開放政策の一環である。当初は日本語の習得を主にしたような留学生の専攻であったが、八〇年代には各種の専門分野を選ぶ者も増えてきた。ただ、一九八〇年代では大学院博士課程で工学博士や理学博士、あるいは農学博士の学位を取って帰国しても、それを活かせる大学や研究所、また企業が中国に存在しないと、帰国をためらう留学生も多かった。それでも広い中国各地から一〇〇〇〇人近い留学生が福岡市の九州大学に到来した。数年経つと私の東洋史学の研究室さえも、一〇名を超える中学留学生が溢れることになった」p.70
- 9 これを受けて一九八六年から「日本語教育能力検定試験」が日本語教育学会によって開始された。
- 10 留学生数はいずれも「独立行政法人 日本学生支援機構」のホームページ内にある「留学生に関する調査」内外国人留学生在籍状況調査からのものである。
- 11 白石勝巳「留学生数の変遷と入管施策から見る留学生一〇万人計画」(ABK留学生メールニュース 二〇〇六年一月二月号(第六一号))財団法人アジア学生文化協会) www.abk.or.jp/asia/pdf/20061225.pdf
- 12 「二〇一八年度入試情報 私立大学 定員割れ大学数は2年連続で減少」河合塾2018/8/8 Keinere.jp/topics/18/20180808とは、九〇年代に触れて、以下のように現在

までの状況をまとめていた。「定員割れ大学の割合は一九九〇年代後半から徐々に上昇し、二〇〇〇年代前半には約三割で推移していた。二〇〇六年度から再び上昇しはじめ、半数に迫る四〇%台後半となった年もあった」。

13 中国ではそれぞれの大学が、独立学院という私立大学を設置して学生を受け入れることで、進学者の増加に対応していた。

14 一九九〇年より日本語学校の審査認定が始まる。また、法務省による入国審査が厳しくなり、一九九四年から日本語学校の入学者が激減した。

15 岩井俊二監督映画『スワロウテイル』（一九九六年）は、アジアからの違法滞在者たちの夢とお金を求める日本での生活を象徴的に描いたアクション作品である。

16 たとえば九〇年代以降の大連市での日系企業の進出の影響もあり、大連外国語大学の日本語学科が中国で一番多くの定員数を持っている。

17 平成三〇（二〇一八）年に法務省入国管理局から示された「留学生の現況と告示基準の改正について」では、この時代の留学生の状況について「新規入国者数、在留外国人数ともに平成一五（二〇〇三）年頃に留学生の不法残留者数が増加する傾向にあったことを受け、経費支弁能力等に係る審査を徹底するなど慎重な審査を実施したこと等の影響で、平成一六（二〇〇四）年に大幅に減少。また、震災の影響により、新規入国者数は平成二三（二〇一一）年に、在留外国人数は平成二三

（二〇一一）年及び平成二四（二〇一四）年に大幅に減少。国籍・地域別では、新規入国者数、在留外国人数ともに中国とベトナムで過半を占めており、ベトナム及び

18 びネパールは継続して増加傾向」とまとめられていた。 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashin/gikai/kondankaito/nihongo_suishin/

二〇〇三年に解散した酒田短期大学は、在籍学生ほとんどが中国人留学生で占められていて、しかも在籍しているのにも関わらず東京等で就業していたことで問題化

していた。その結果の解散である。また、二〇一〇年に、福岡の日本経済大学は新入学生の九割が留学生で、しかも系列の専門学校だった校舎を東京キャンパスとして使用

19 していた。同様の教育システムを救国際大学も取っていて、管理体制が問題となった。二〇一九年には、東京福祉大学が大量の研究生として留学生を受け入れ、その管

理体制が問題となった。

20 雑誌「日本語教育」では外国人論文は一九八〇年代から一定の割合で掲載されるようになった。

21 日本文学協会の会員名簿を調べると、一九九二年の名簿で海外居住者（国籍人種は無関係）は欧米圏での四件だが、一九九四年のそれでは中国圏の一件、韓国の四件

22 があり、計一件（全会員数一四六）、一九九八年では一八件（全会員数一六八九）、二〇〇四年では三二件（全会員数一六四〇）、二〇一四年では二三件（全会員数

一五九〇）と推移していた。

23 和漢文学会の口頭発表者を調べると二〇〇〇年代の半ばからは、大学院留学生による研究発表が一定の割合を占めている

24 ここでは、第二回日中韓サミット（二〇〇九）において合意された大学間交流促進に基づいて、二〇一一年に具体化された交換留学がダブルディグリーを共同で可能に

25 する大学の教育プログラムに対する広域連携「キャンパス・アジア」を具体例と考えた。

『二松学舎百年史』一九七七年一〇月 学校法人二松学舎

注1に同じ

たとえば、この研究所の第六条にある「事業」の「三」には、「外国人研究者との交歓」とある。今日という、交流であろうか。

1977-2017 历年全国高考人数和录取率统计

时间 (年)	参加高考人数 (万人)	录取人数 (万人)	录取率 (%)
1977	570	27	5%
1978	610	40.2	7%
1979	468	28	6%
1980	333	28	8%
1981	259	28	11%
1982	187	32	17%
1983	167	39	23%
1984	164	48	29%
1985	176	62	35%
1986	191	57	30%
1987	228	62	27%
1988	272	67	25%
1989	266	60	23%
1990	283	61	22%
1991	296	62	21%
1992	303	75	25%
1993	286	98	34%
1994	251	90	36%
1995	253	93	37%
1996	241	97	40%
1997	278	100	36%
1998	320	108	34%
1999	288	160	56%
2000	375	221	59%
2001	454	268	59%
2002	510	320	63%
2003	613	382	62%
2004	729	447	61%
2005	877	504	57%
2006	950	546	57%
2007	1010	566	56%
2008	1050	599	57%
2009	1020	629	62%
2010	946	657	69%
2011	933	675	72%
2012	915	685	75%
2013	912	694	76%
2014	939	698	74.30%
2015	942	700	74%
2016	940	772	82.15%
2017	940		

補注1 中国の進学率

一九七七一〇一七 历年全国高考人数和录取率统计

<https://wenku.baidu.com/view/0908534876f84ae45c3b3567ec102de2bd187>

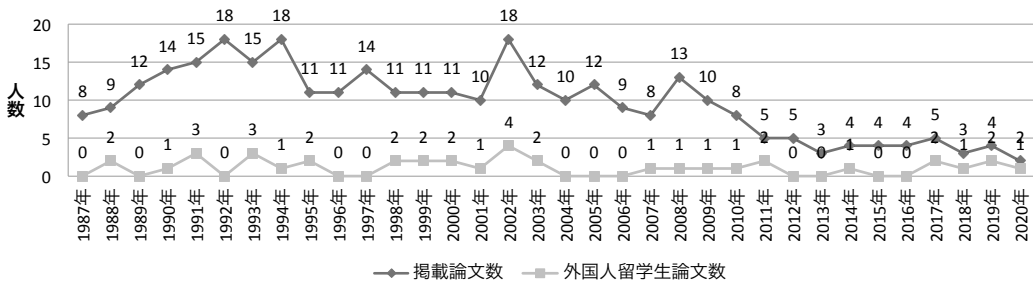
大学院紀要『二松』 二松學舎大学大学院文学研究科

巻号	発行	論文数	外国人 留学生数	名 前	タイトル
1	1987年	8	0	/	/
2	1988年	9	2	林 叢	漱石の「愚」と良寛の「愚」 ——「則天去私」を基礎づける思想——
				楊璧慈	漱石と『板橋集』
3	1989年	12	0	/	/
4	1990年	14	1	洪樵榕	宋學が残した幾つかの問題
5	1991年	15	3	孫久富	人麿の称賛歌と『詩経』の敬天思想
				楊璧慈	漱石小論 ——『こころ』をめぐる二三の覚書——
				莫邦富	中日言語のある側面に関する考察 ——「魚」の相違について——
6	1992年	18	0	/	/
7	1993年	15	3	曹紗玉	悪と悪魔 ——大正五年から七年に書かれた四編の切支丹物 における芥川龍之介とキリスト教——
				張 平	公家日記の漢語表現 ——「進退」「進止」を契機とする中日比較——
				黄華珍	宋刻本『莊子音義』の比較研究
8	1994年	18	1	黄華珍	『莊子音義』の構成について
9	1995年	11	2	洪樵榕	先秦の政治思想
				黄華珍	和刻本『莊子音義』について
10	1996年	11	0	/	/
11	1997年	14	0	/	/
12	1998年	11	2	張新英	謡曲「楊貴妃」の研究 ——その典拠・とくに『長恨歌伝』の役割——
				余金龍	李商隱と佛教との関係について
13	1999年	11	2	丁 莉	竹取物語と中国の竹・月伝承
				崔順愛	川端康成『千羽鶴』論 ——茶の湯の視点から
14	2000年	11	2	徐 前	漱石と子規の漢詩作品への一考察 ——唱和する二作品を中心に——
				李 平	小田嶽夫の魯迅観 ——『魯迅伝』を中心として——
15	2001年	10	1	熊慧蘇	「菊花の約」の再検討 ——原作における弟（張勤）の位置付けを中心に——
16	2002年	18	4	河美英	白雄と一茶 ——「弱者」を詠んだ俳句をめぐる——
				徐 前	漱石と子規にとっての松山 ——漢詩を中心として——
				白小微	李煜の詞に見る「病態美」について
				聞黎明	中國近代文化和政治史上の聞一多
17	2003年	12	2	白小微	李商隱と南唐二主
				杜軼文	古城貞吉と『支那文学史』について

補注2 二松学舎大学大学院文学研究科 紀要『二松』掲載論文における留学生等執筆論文の割合

記念論文 日中関係と日文学そして共同化する東アジアという視座 ——研究所設立50周年に寄せて——

巻号	発行	論文数	外国人留学生数	名前	タイトル
18	2004年	10	0	/	/
19	2005年	12	0	/	/
20	2006年	9	0	/	/
21	2007年	8	1	熊慧蘇	『新編金瓶梅』の武松譚 ——中国文学からの継承と変容——
22	2008年	13	1	金永昊	『剪灯新話』の翻案とアジア漢字文化圏怪異小説の成立 ——地獄譚「令狐生冥夢録」の翻案を中心に——
23	2009年	10	1	熊慧蘇	『假名列女傳』の翻訳手法
24	2010年	8	1	耿景華	空海の「爲大使與福州觀察使書」についての考察
25	2011年	5	2	李 選	魯迅と三十年代左翼文学運動觀 ——魯迅と「左連」および「国防文学論争」——
				杜軼文	児島献吉郎著『支那文学史綱』に関する考察
26	2012年	5	0	/	/
27	2013年	3	0	/	/
28	2014年	4	1	具 香	『新撰遊覚往來』と『異制庭訓往來』の比較
29	2015年	4	0	/	/
30	2016年	4	0	/	/
31	2017年	5	2	楊 爽	評伝から漢文小説へ ——依田学海『譚海』にみる『名家略伝』の翻訳方法——
				劉麗蓉	常盤大定とその中国体験
32	2018年	3	1	劉 麗	本居宣長「漢意」批判の方法について ——三つの対立関係を中心に——
33	2019年	4	2	何曉芳	[研究ノート] 中国における川端康成文学研究の動向 ——「雪国」を中心として——
				張佩如	現代漢語嘗試範疇的標記與形式
34	2020年	2	1	張三妮	[研究ノート] 一八九四～一九一〇韓国漢文教育と日本 ——初学教科書を中心に——



補注3 来日留学生数の推移

留学生統計		
年 (5月1日)	日本に在籍留学生総人数 (人)	中国大陸留学生人数 (人)
1978年	5,849	23
1979年	5,993	127
1980年	6,572	501
1981年	7,179	3,652
1982年	8,116	1,085
1983年	10,428	4,846
1984年	12,410	2,491
1985年	15,009	2,730
1986年	18,631	4,418
1987年	22,154	5,661
1988年	25,643	7,708
1989年	31,251	10,850
1990年	41,347	18,063
1991年	45,066	19,625
1992年	48,561	20,437
1993年	52,405	21,801
1994年	53,787	23,256
1995年	53,847	24,026
1996年	52,921	23,341
1997年	51,047	22,323
1998年	51,298	22,810
1999年	55,755	25,907
2000年	64,011	32,297
2001年	78,812	44,014
2002年	95,550	58,533
2003年	109,508	70,814
2004年	117,302	77,713
2005年	121,812	80,592
2006年	117,927	74,292
2007年	118,498	71,277
2008年	123,829	72,766
2009年	132,720	79,082
2010年	141,774	86,173
2011年	138,075	87,533
2012年	137,756	86,324
2013年	135,519	81,884
2014年	184,155	94,399
2015年	208,379	94,111
2016年	239,287	98,483
2017年	267,042	107,260
2018年	298,980	114,950

日本学生支援機構より
(https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html)